

街路樹

外国語活動・英語科の視点と実践例紹介



教育相談室の役割

今回の学習指導要領の改訂での外国語科、英語科におけるキーワードは、育成すべき資質・能力の3つの柱の1つである「思考力、判断力、表現力」に記されている「目的・場面・状況」です。「ふくしまの授業スタンダード」にも「多様な言語活動」とあるように、コミュニケーションを行わせる場合は、目的・場面・状況などを意識させて既習のものを含めた多様な表現を実際に使用することが大切であるといえます。

各学校で授業を参観させていただいた際に、次のような実践例がありました。小学校外国語活動の授業では、「来校するヤングアメリカンズに自己紹介できるようにしよう」と目的意識を持たせて、自己紹介文を考えさせる授業がありました。また中学校英語科の授業では、ALTに「教科書を参考にして、震災時の様子を自分たちの言葉で伝えよう」という目的意識を持たせた実践がありました。教科書の長文をそのまま「読む」のではなく、既習事項を活用しながら「伝える」ことを主な言語活動とし、生徒達は意欲的に取り組んでいました。ぜひ、小・中各校種において、子どもたちに「学びたい」「使えるようになりたい」と感じさせながら、「目的・場面・状況」を意識した授業にグイッと引き込んでいただきたいと思えます。

また、令和6年度まで、外国語活動・外国語科の授業の履修時数が異なる小学生が中学校へ入学します。小学校では、どのような言語材料に触れるのか、どのくらいの外国語活動・外国語科の時数をかけて学んできたのかを中学校でも理解していただき、小中連携の視点を持ちながら日々の授業に取り組んでほしいと思えます。

「なぜ、この子は何度言い聞かせても同じ過ちを繰り返すのだろう。」「どうしてこの子は何回教えても、漢字を覚えられないし書けないのだろう。」また、「この子は友だちの嫌がる事を平気で言ったりやったりするなあ。」……そんな子どもが教室の中にいませんか？

ひょっとしたら、その子は自分ではどうしようもない“認知の困難さ”や“特性”を抱えているのかもしれない。

その困難さや特性に対応するために、教育相談室では、相談員との面接の後、必要に応じ次のようなところへつなぐことが可能です。

- ・臨床心理士による心理発達検査
- ・専門医によるドクター面談
- ・教育支援室の臨床心理士による
カウンセリング



相談内容により、どこにつなぐ必要があるか判断します。つなぐことにより、親や教師がその子が抱える困難さや特性を理解し、どのように支え導いていけばよいのか、アプローチのヒントを得ることができるようになって考えています。

一番悩み苦しんでいるのはその子自身です。その子を理解し、対応する手掛かりとして、「子ども健康教育相談」をご活用ください。



学校組織マネジメント講座から

9月18日に行われたいわき市総合教育センター「学校組織マネジメント講座」において、Weness Japan Coaching & Consultingの大野 宏先生から、企業がコーチングを導入する理由には、以下のようなことがあると教えていただきました。

- (1) 自立型・自律型の人材育成
- (2) 社員のキャリア開発支援
- (3) 効果的なOJTの実践 など



(「部下を伸ばすコーチング」榎本秀剛氏 参照)

企業だけではなく、学校現場でも今後、教員の大量退職に伴い、若手教員の増加が予想されています。そのような喫緊の課題を解決する上でも、コーチングには有効な内容が多く含まれていると考えられます。

さらに、コーチングでは、「ひとが本来もっている能力や可能性を最大限発揮できるよう『引き出す』対話」が重要であるとのことでした。

この『引き出す』対話についてコーチングスキルの「認知(ほめる)」、「傾聴」の2点から紹介します。

◎「認知(ほめる)」

- ① 相手に関心をもつ。
- ② 相手の行動や状態に変化があったときにほめることで、「見ていてくれる」安心感につながる。
- ③ 「君はすごい(you message)」と同時に「私もうれしい(I message)」と伝えること。

◎「傾聴」

- ① 話は最後まで聴く。
- ② 言っていることを否定しない。
- ③ 五感全部を使って、相手の本音と背景、変化を聴く。

これらについて、研修では演習を通して学びました。研修者からは、「コーチングスキルは、日常の児童・生徒への対応や保護者対応にも有効である」との声が聞かれました。今後の実務に役立つ研修となりました。